

むすびでほとく

ー住宅地に点在する日常の行為をひらく建築ー

福祉施設の中に集約されているケアを日常の行為へと捉えなお。高齢者が自宅で長く住み続けられる環境を整えると同時に、若い世代を呼び込む受け皿をまちの中に組み込むことで、西小石町を「衰退する住宅地」から「世代を超えて住み継がれる持続可能なまち」へと再生させる。



食のむすび

西小石町

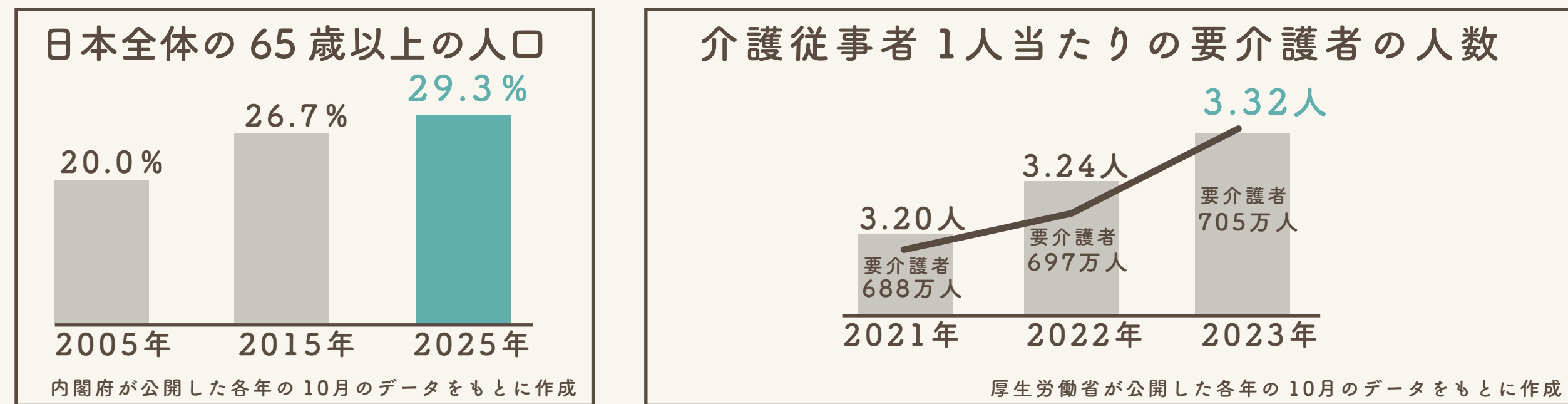
洗のむすび

健のむすび



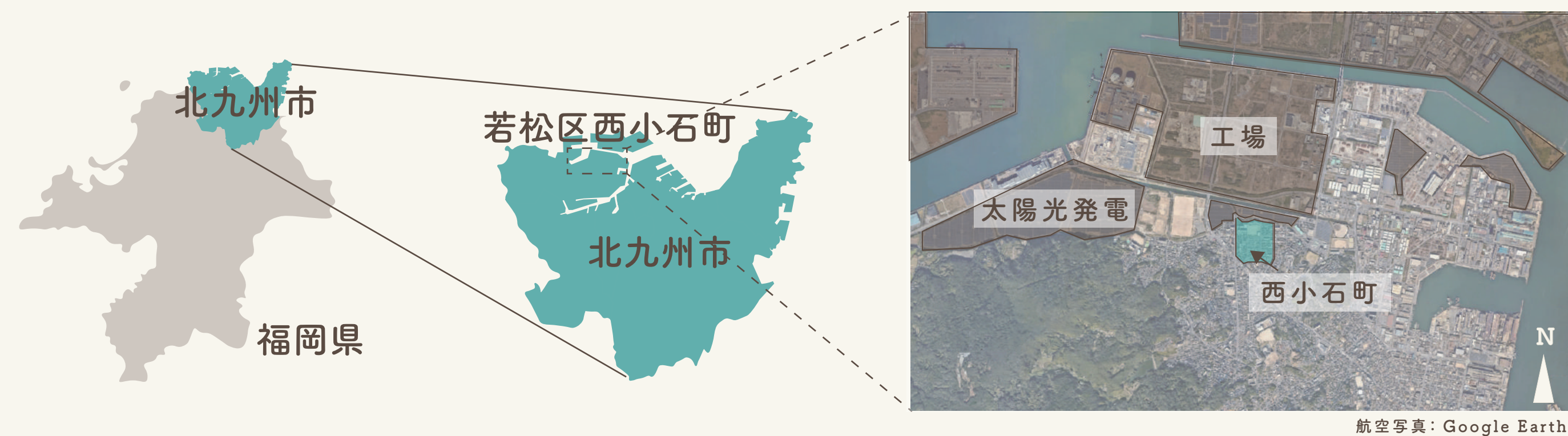
背景

01. 高齢化による介護の限界



近年日本では、高齢化の進行により介護従事者 1 人当たりの要介護者の人数は増加しており、今後介護システムが成り立たなくなる可能性がある
→ **自宅で生活できる期間を長くする必要がある**

02. 福岡県北九州市若松区西小石町



工場が集まる響灘地区に隣接している住宅地である。響灘地区は 1958 年 (昭和 33 年) 以降に埋め立てが進められ、2000 ヘクタールの広さを持っている。ブリヂストンを始めとする様々な工場があり、近年では **新工場の建設** が進められている。また、太陽光発電があり **産業地域と近接している住宅地** である。都市計画図では、**居住誘導区域** に位置しており、用途区域は **第一種住居地域** に属している。

03. 高齢者と若者の多いまち

北九州市と西小石町の年齢別の人口の比較					
北九州市	0～14歳 (約 11.3%)	15～29歳 (約 14.5%)	30～49歳 (約 22.2%)	50～64歳 (約 20.4%)	65歳以上 (約 31.6%)
	102人 (約 12.8%)	114人 (約 14.2%)	160人 (約 20.0%)	155人 (約 19.3%)	270人 (約 33.7%)

北九州市ホームページの資料をもとに作成
(2025 年 9 月 30 日時点)

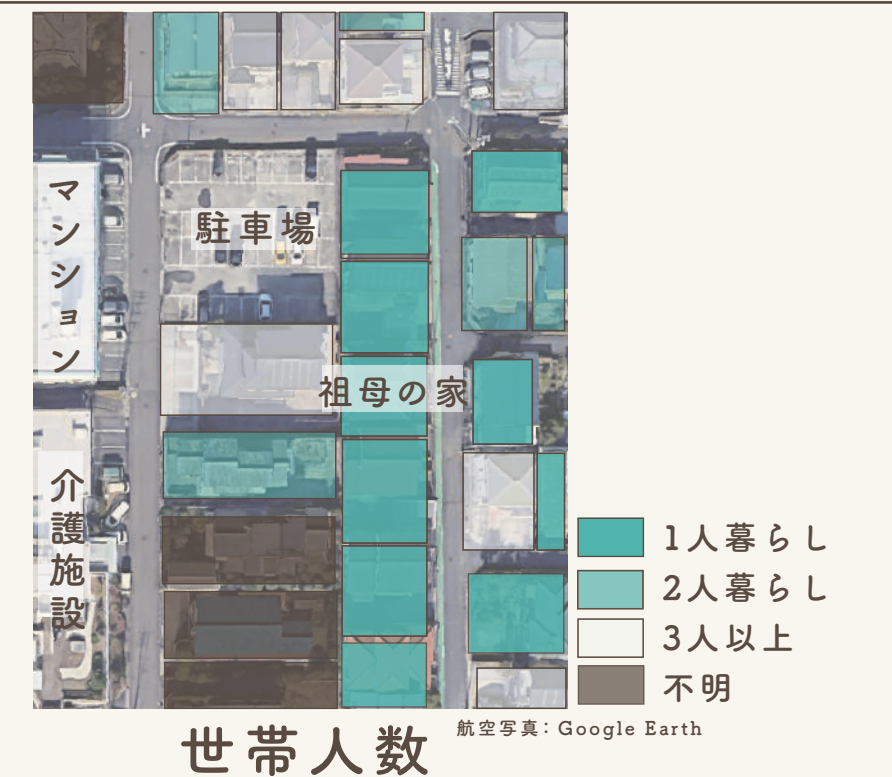
年齢構成を北九州市と比較すると、西小石町は 65 歳以上の割合 (高齢者率) が約 33.7% と、市平均の 約 31.6% を上回っている。0～14 歳 (若年層) の割合は 約 12.8% と市平均の 約 11.3% を上回っている。
西小石町は **若年層と高齢者の多いまち** だといえる。

04. 1 人暮らしをしている祖母

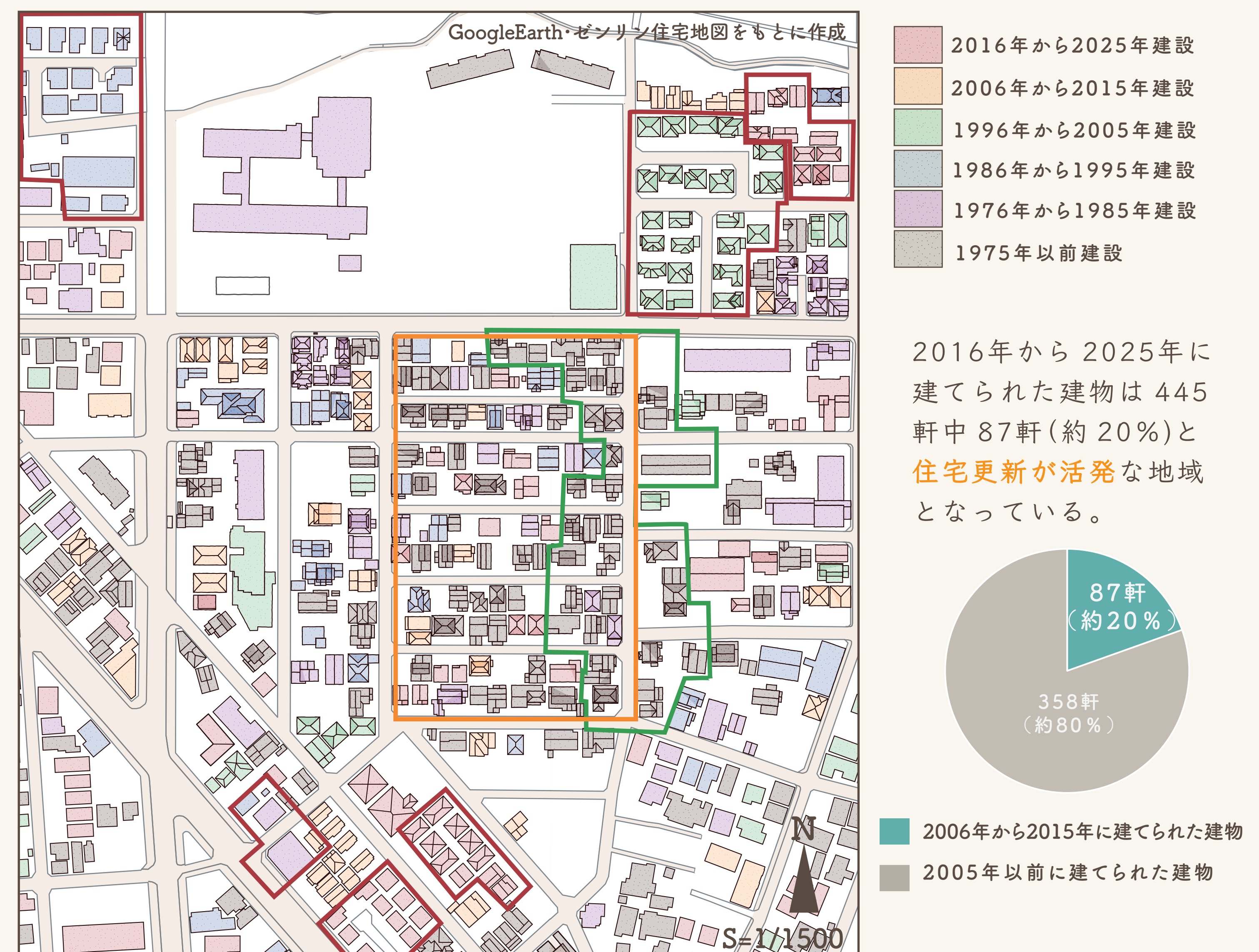
祖母は西小石町で 1 人暮らしをしている。
祖母の近所では祖母以外にも
1 人暮らしをしている世帯が増加している。

↓

**1 人暮らしや高齢になっても
長く住み続けられるまちにしたい**



05. 活発な住宅更新



同じ年代に建てられた住宅が固まっている



将来的に **同じタイミングで 1 人世帯が増えたり、空家家になったりする** 可能性がある。



古い家が多く見られる



高齢者夫婦の 2 人暮らしや高齢者の 1 人暮らしである可能性が高い。犯罪や孤独死、認知症のリスクがある。



新しい家と古い家が混在している



世代の入れ替わり が起きている

課題

06. 限られたケアの選択肢

現在の福祉制度は、生活が成り立たなくなった段階で施設へと移行する仕組みが中心
→地域で住み続けることを支える場は不足している

■日常生活と切り離された福祉施設

西小石町には近年、福祉施設が増加している。生活の多くは施設内部で完結することとなり、町や日常生活との連続性は失われやすい。加えて、施設が周囲のまちに対して閉じたつくりになると、外部との関係がさらに限定され、施設と日常生活との断絶は強まっていく。

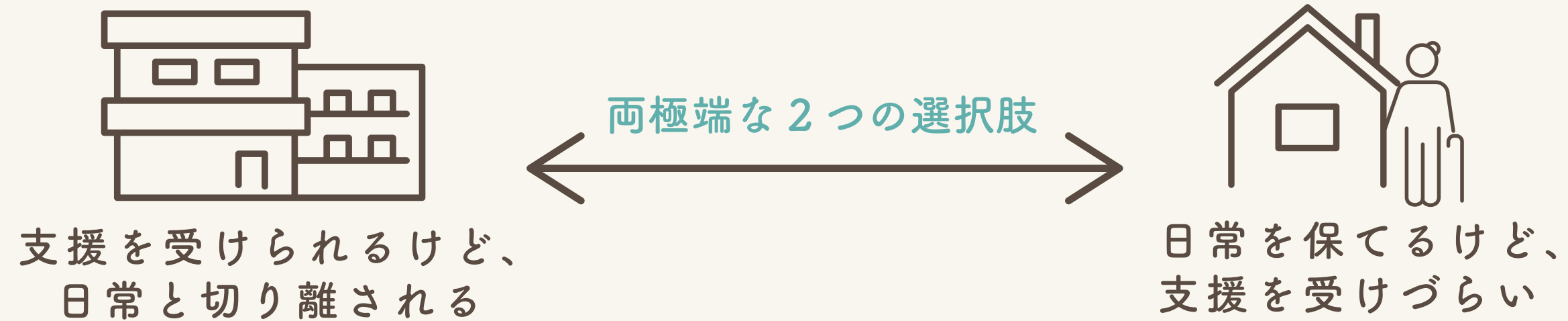


西小石町の福祉施設

■生活行為を抱え込む自宅

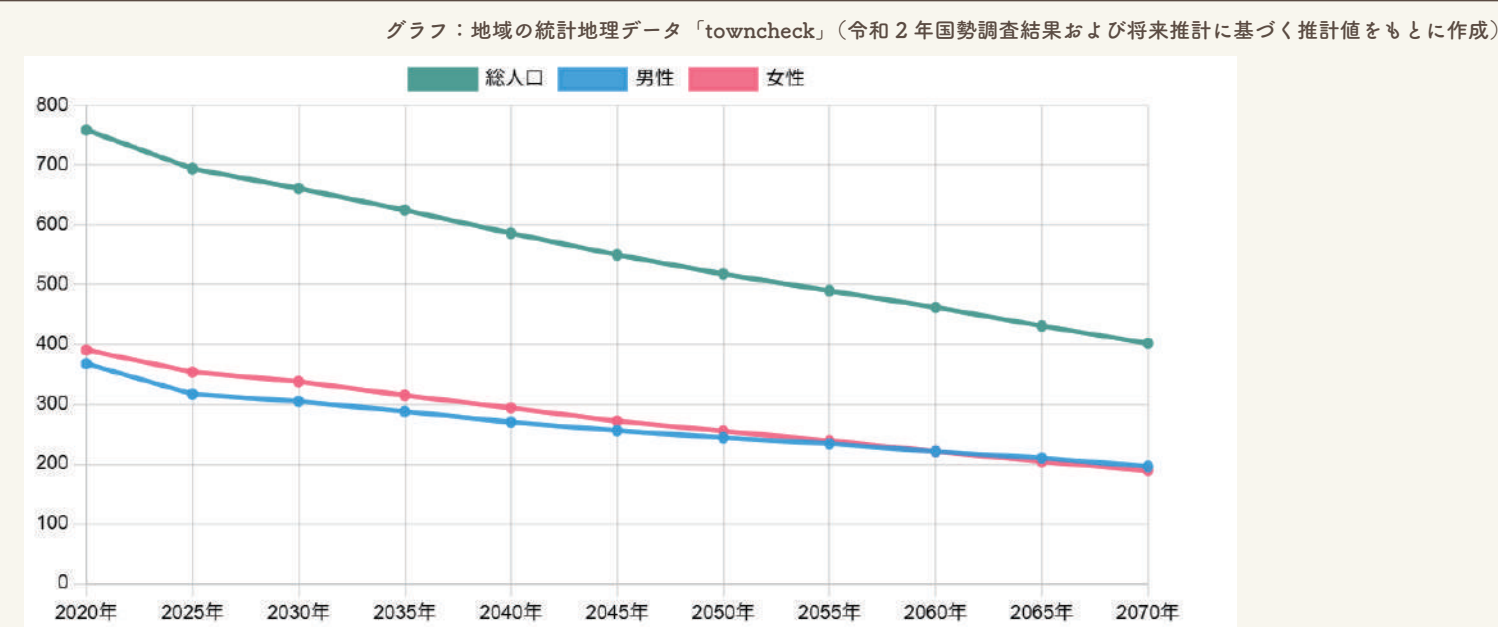
近年、核家族化や単身世帯の増加により、自宅で介護や見守りを行うことが困難になっている。

支援が必要となった場合でも、それを住宅の外に分散させることができず、介護や見守りといった負担が自宅の内側、さらには個人へと押し込められている。



07. 1人暮らし世帯の増加による土地不足

第二次ベビーブームに子どもの人口が急激に増加し、新たに小学校が作られるほどだった。しかし、2020年759人であった町の人口は2070年には、402人になり、47%程度減少することが予測されている。



人口推移予測(西小石町 2020年時点)

第二次ベビーブーム時：若い世帯が増加



現在：高齢世帯の増加

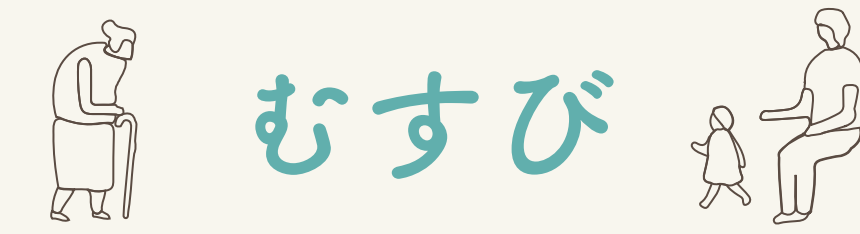


第二次ベビーブームのときの親世代が高齢化

1人暮らし世帯の増加+長寿命化→家に住む期間が長期化
新しい世帯が入ってこないためまちが衰退していく

提案

08. まちの人の生活を支え、若い世帯を受け入れる

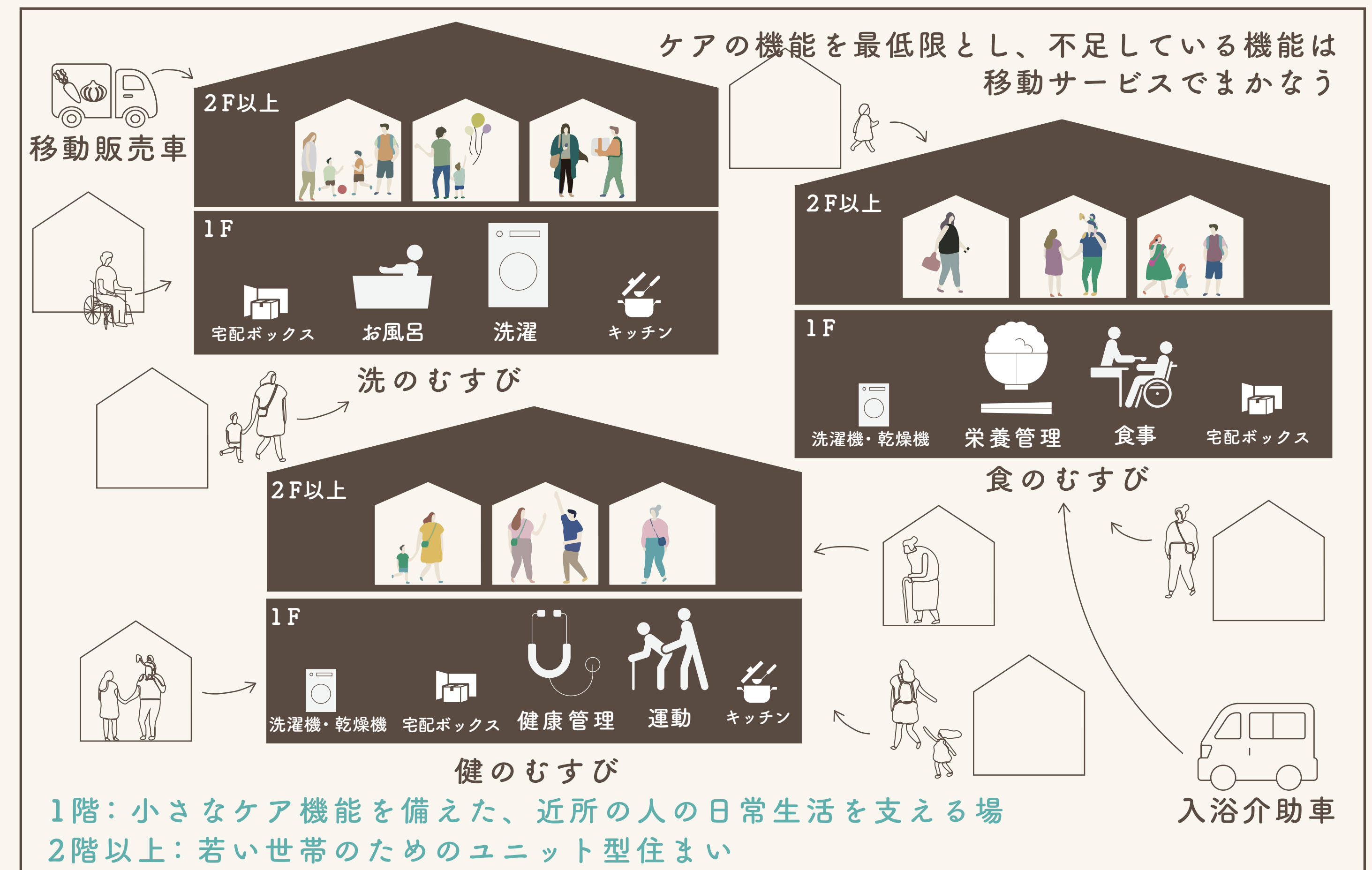


家と福祉施設の中間となる新たな選択肢となる「まちの人を結ぶ空間＝むすび」を提案する
日常と切り離されることなく、支援を受けられる場所
まちの人の生活を支え、若い世帯を受け入れる

09. むすびの構成



ケアの機能を小さくして、まちに点在させる
むすびに「食・洗・健」などの個性を持たせる



設計

■「食」「洗」「健」を軸としたむすびをまちに点在させる。

敷地は**空き家や空き地となっている場所を対象**とし、それぞれの場は周囲半径100mを日常的生活圏として想定する。各圏域が重なりすぎない位置関係で配置した。

福祉施設
空き地・空き家

小学校

市民センター

食のむすび

デイサービス
グループホーム

洗のむすび

デイサービス
ホームクリニック

キッズハウス
デイサービス

健のむすび

公園

就労継続支援B型
生活介護施設

リハビリセンター

10. むすび空間とほとき空間

「むすび」を設計するにあたり、『むすび空間』と『ほとき空間』という概念を定義する

『むすび空間』＝活動が明確な空間

活動が明確なため人が集まるきっかけとなる。



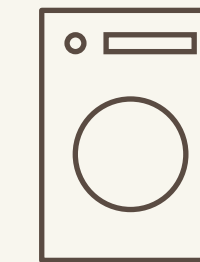
食堂

ご飯を食べる



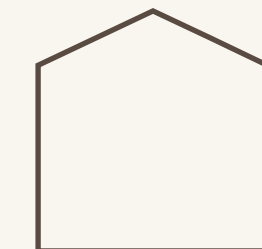
浴室

お風呂に入る



洗濯

洗濯機をまわす



家

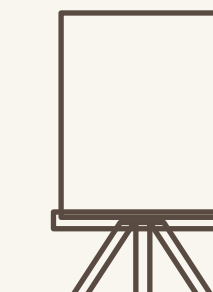
寝る・お風呂に入るなど

『ほとき空間』＝活動が固定されていない空間

むすび空間ではできない多様な活動の受け皿になる。



勉強する



絵を描く



本を読む

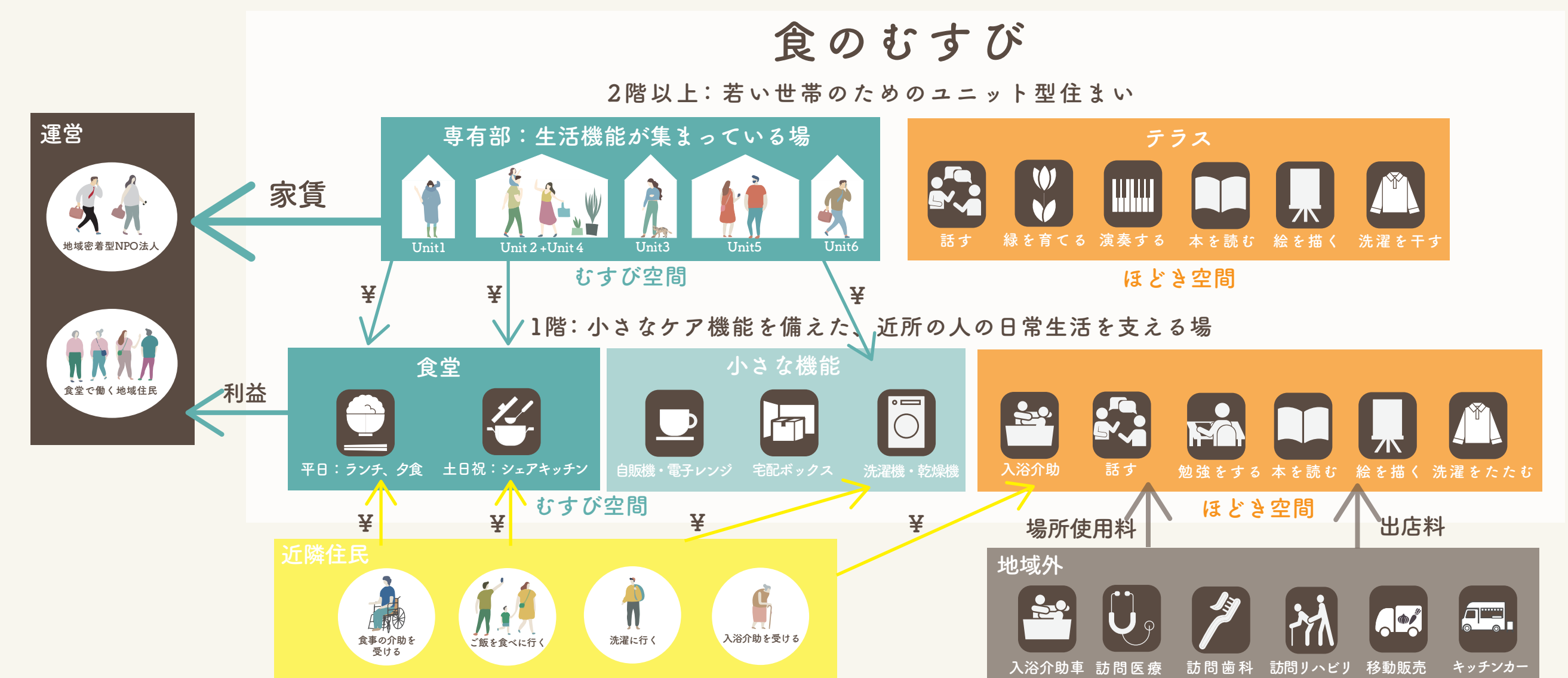


演奏する

11. 運営システム

■食のむすび運営図

地域密着型のNPO法人が主体となって運営を行う。家賃収入や食堂の利益、地域外からの移動サービスの利用料などを収入源として経営する。



食のむすび - 住宅地に対して角度を 45度振る -

敷地周辺の課題

両面道路に面した敷地となっていて、北側の道路が500ミリ下がっており、裏となっている



住宅地に対して 45 度角度を振ることで裏表のない空間にする



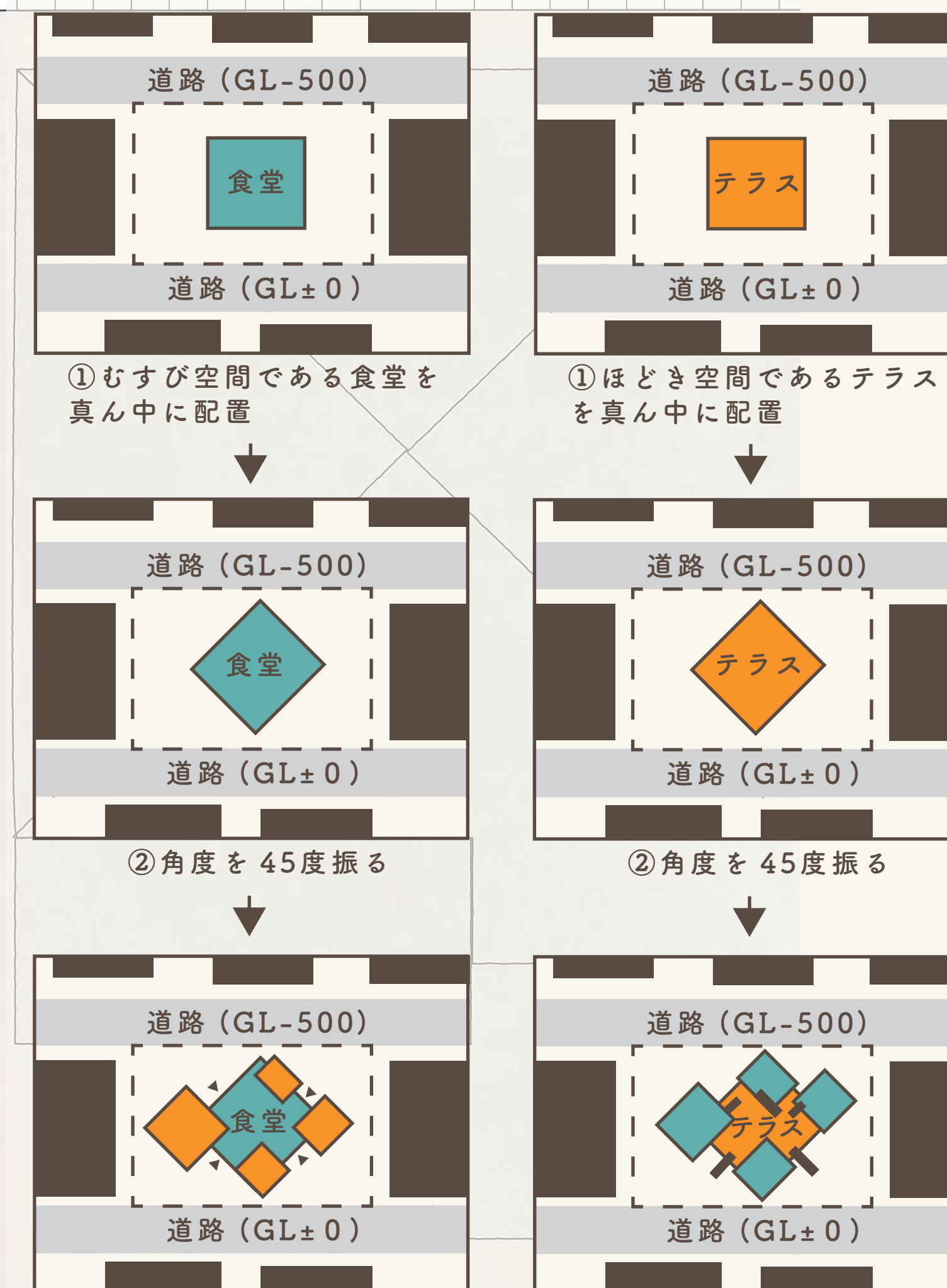
裏側の写真

ダイアグラム

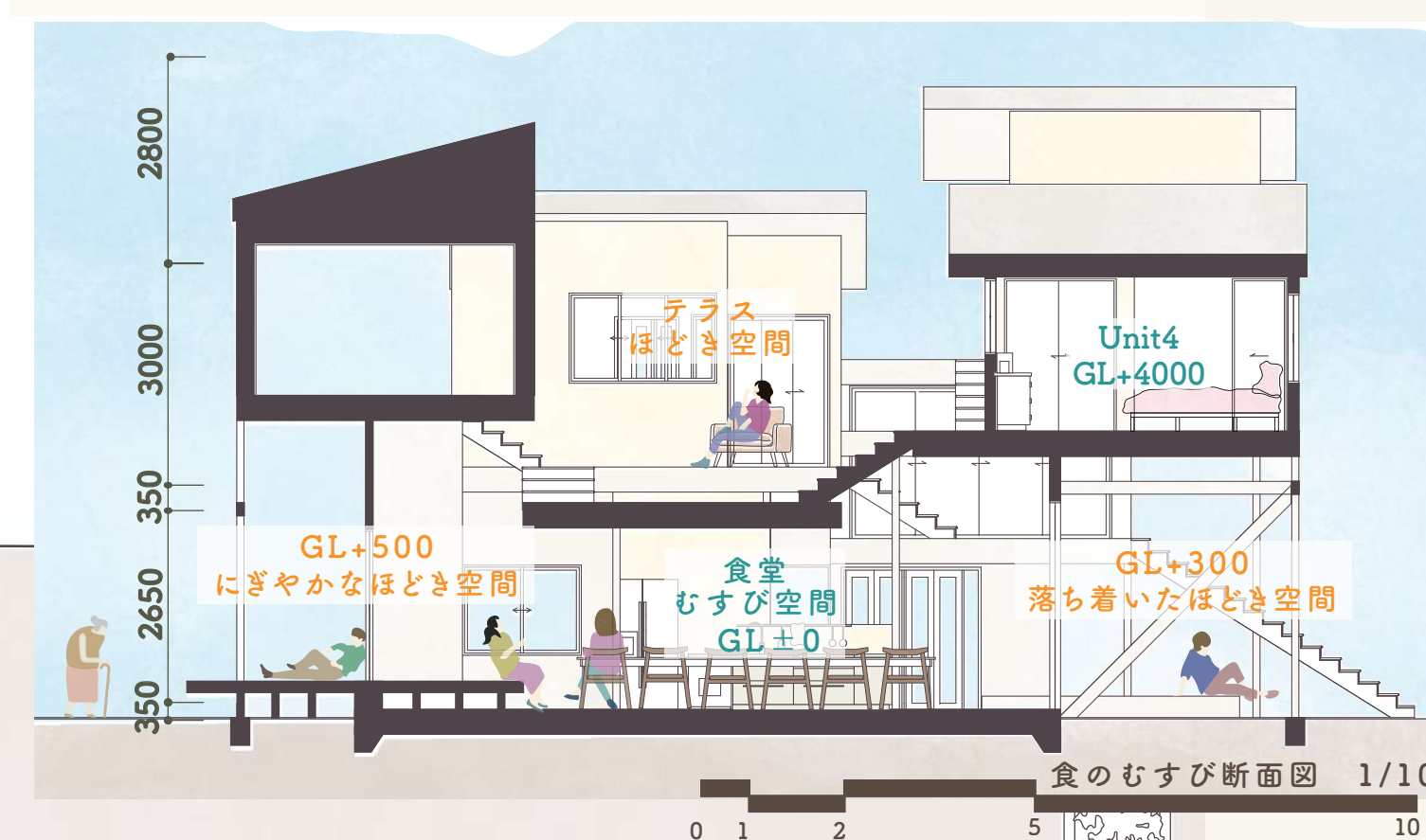
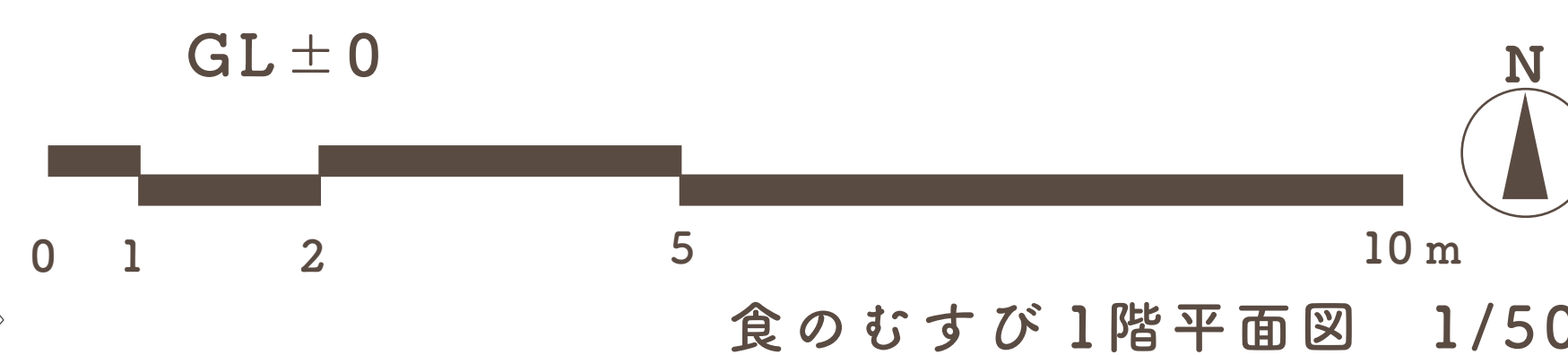
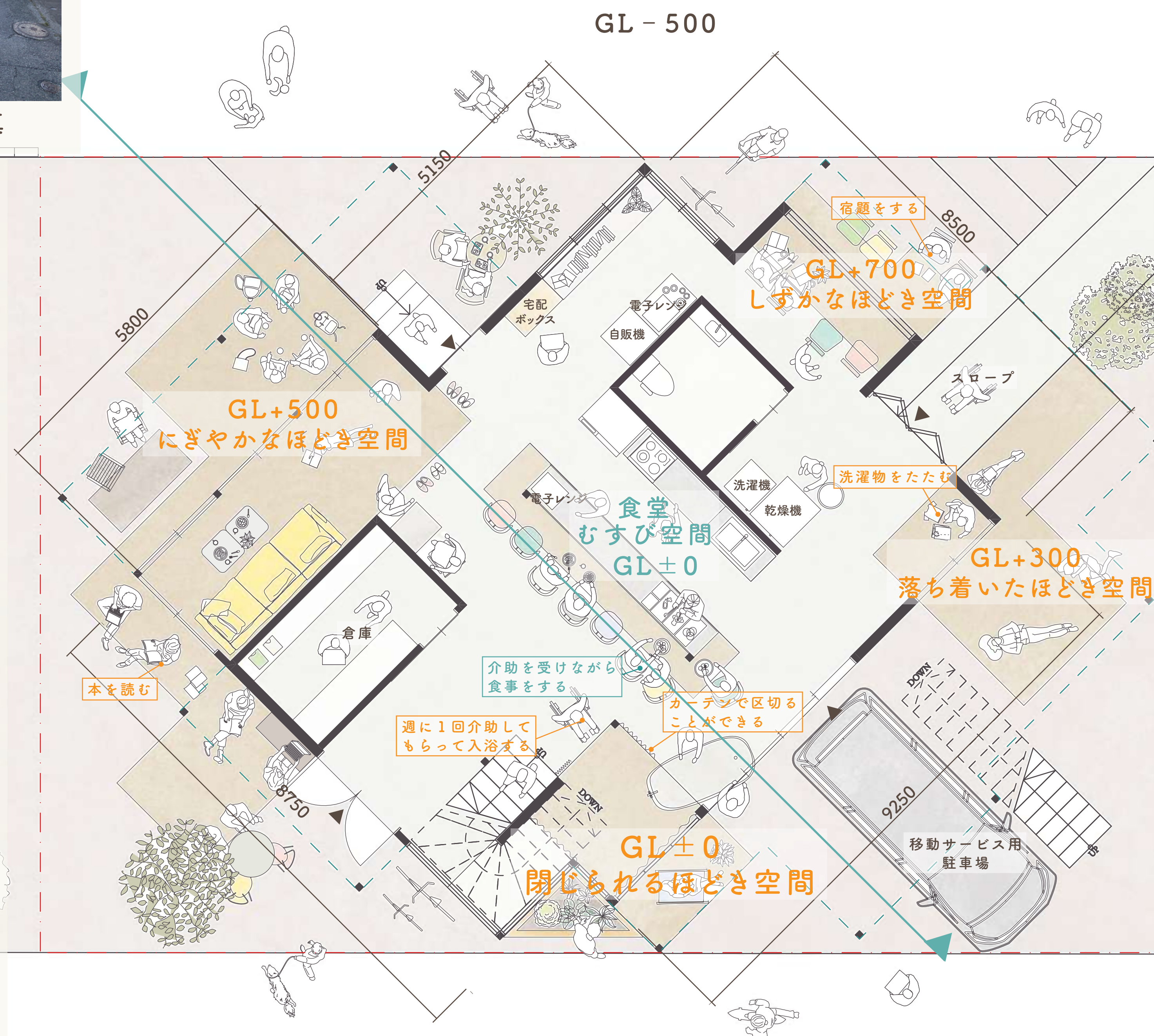
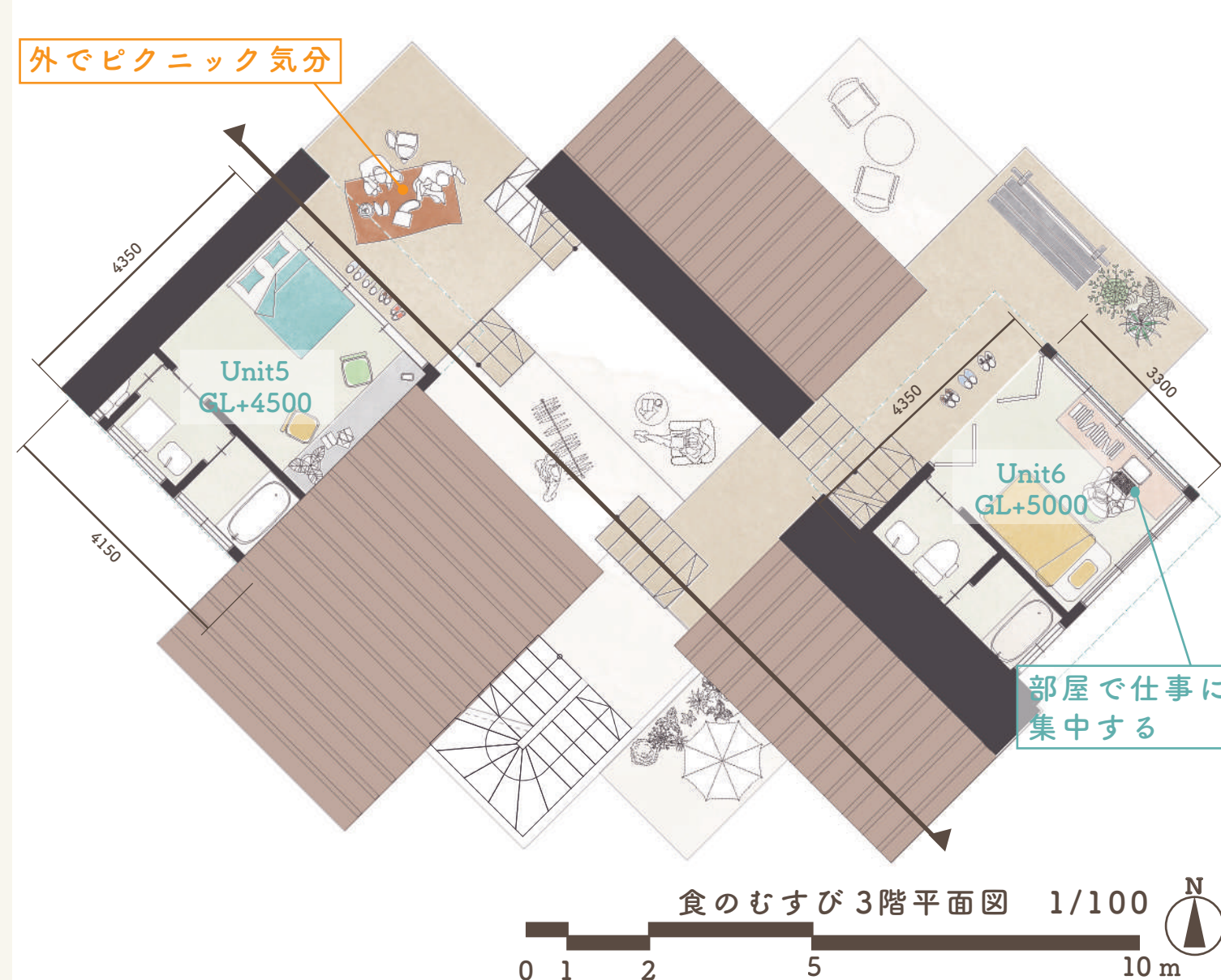
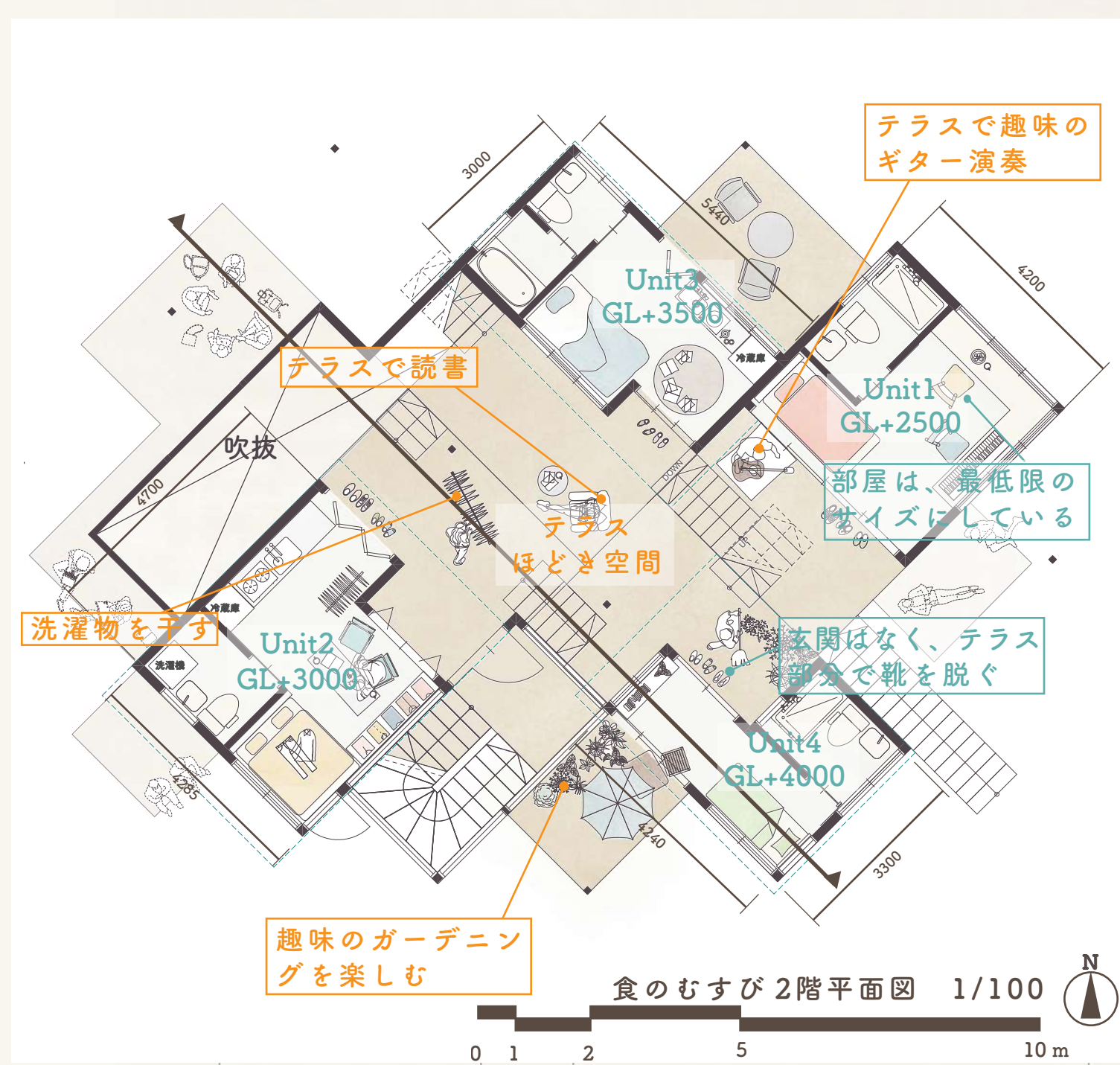


1 F

2 F 以上



③余白にほどこき空間を配置し、入口を複数設けた
③むすび空間である居住部分を配置し、階段を設けた



洗のむすび

■敷地周辺の課題

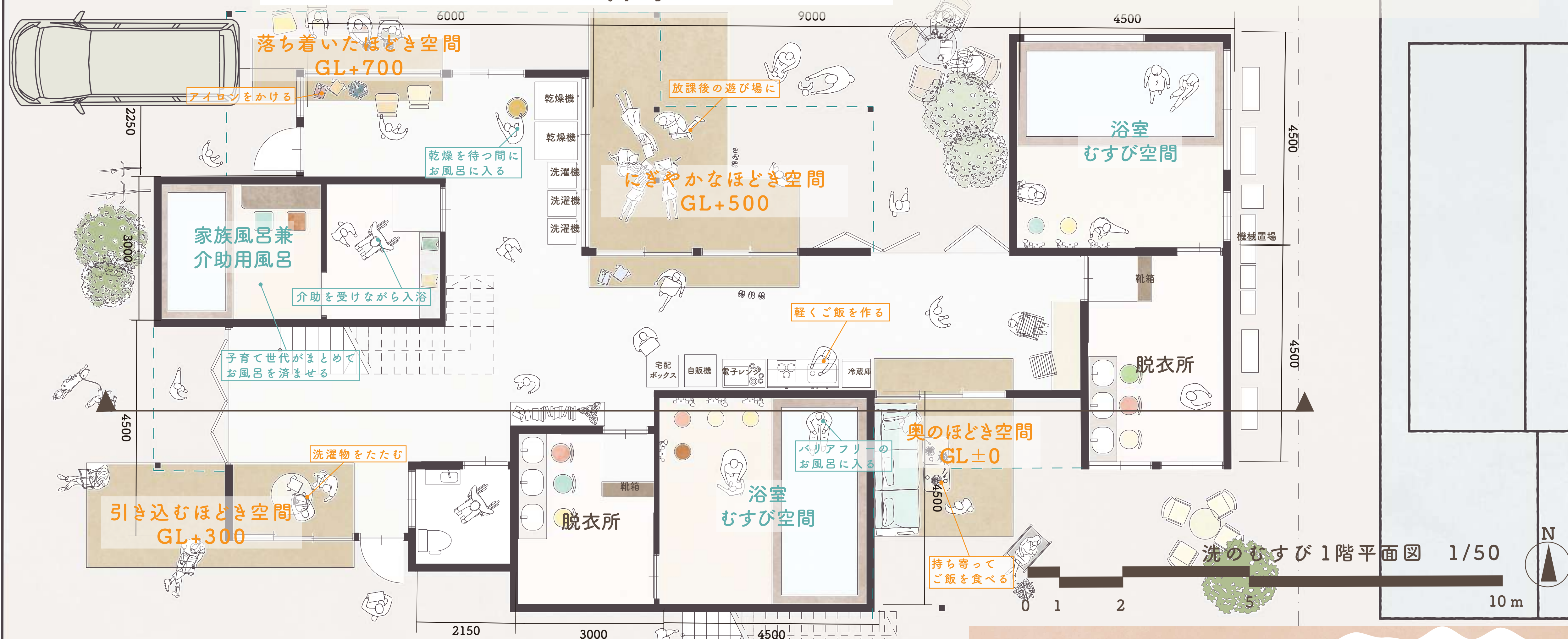
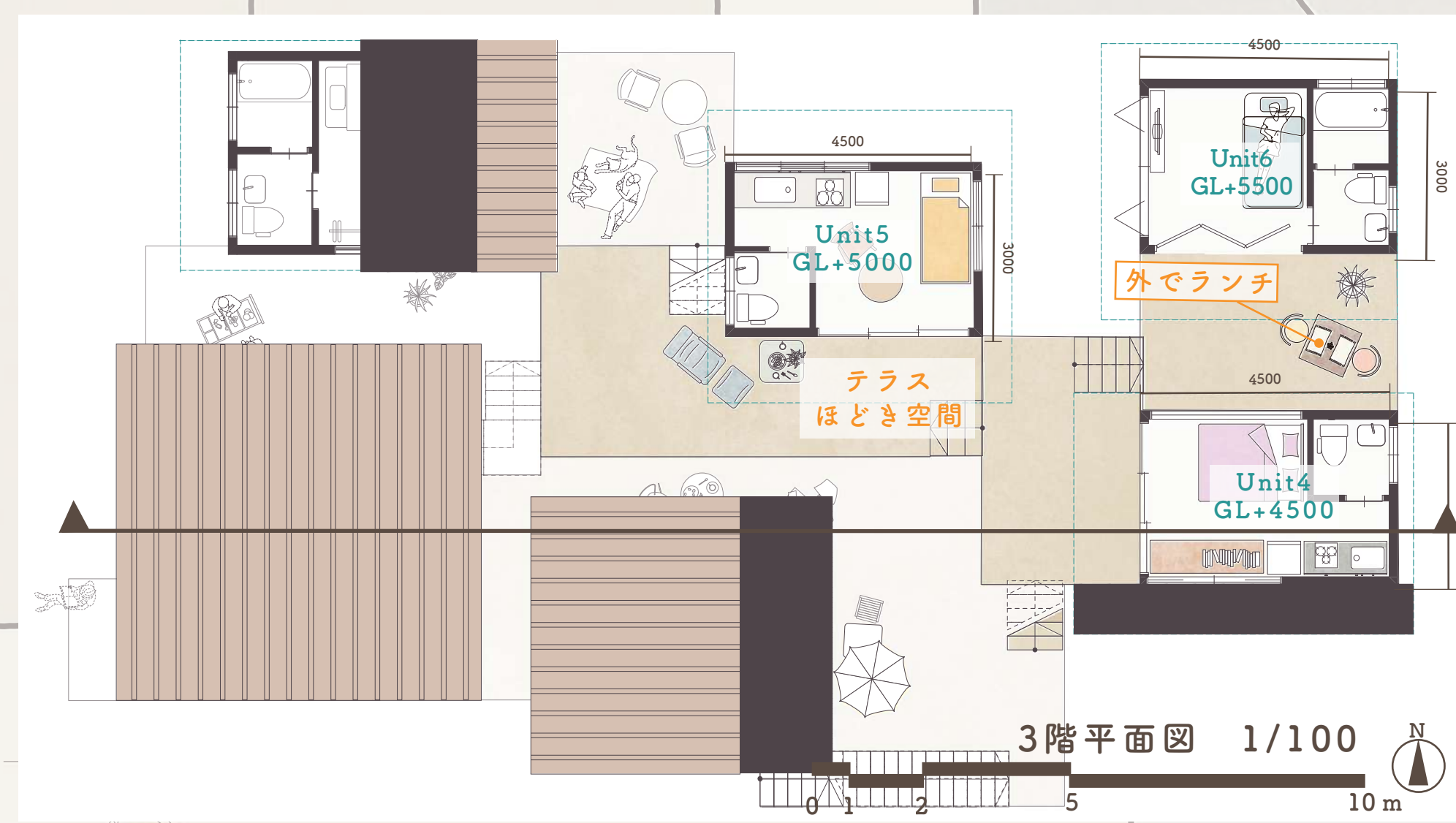
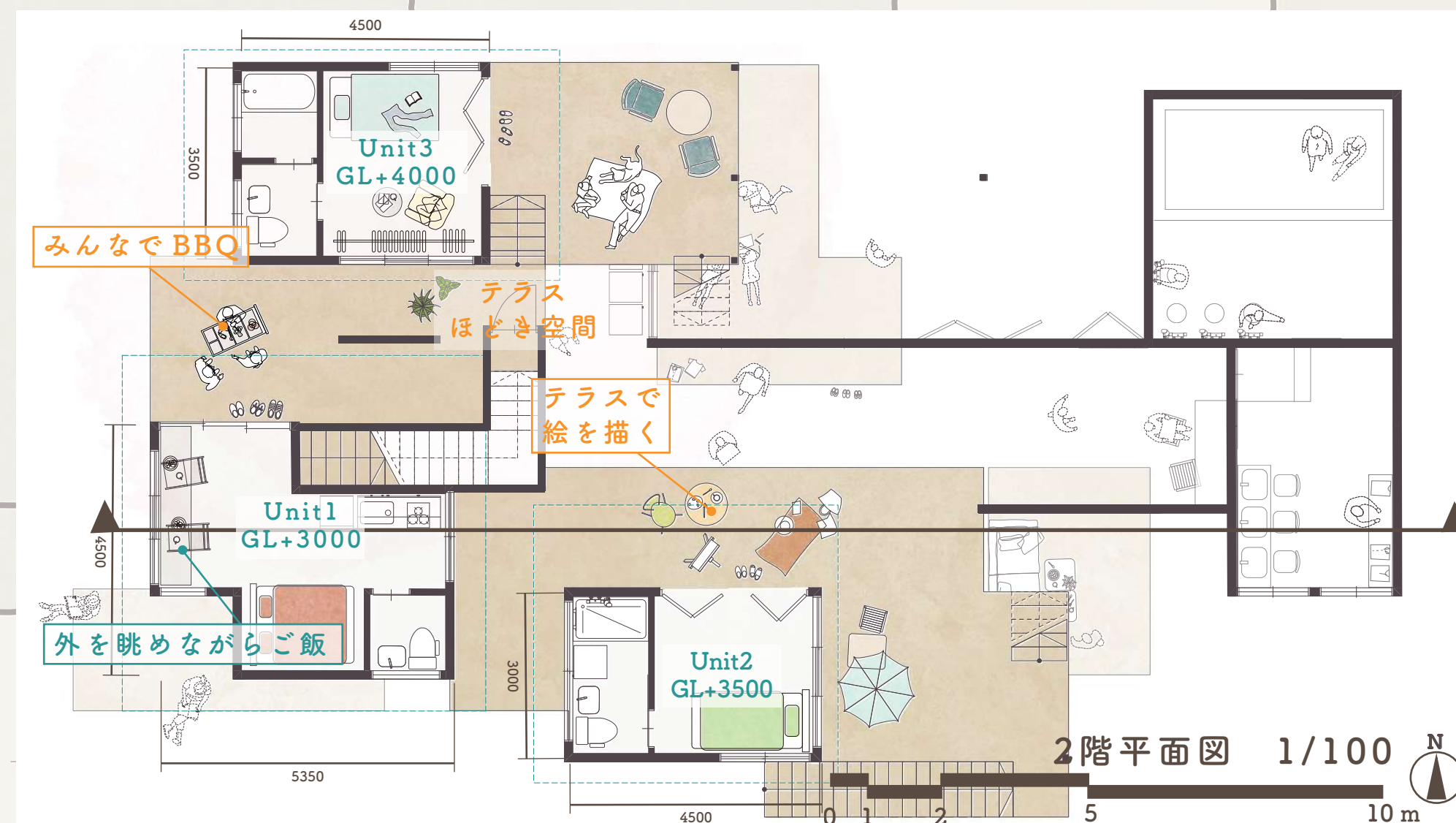
西面が道路に面した敷地で周りの建物が
高くなっていて道路に対して閉じている。



奥行きを使って人を呼び込む



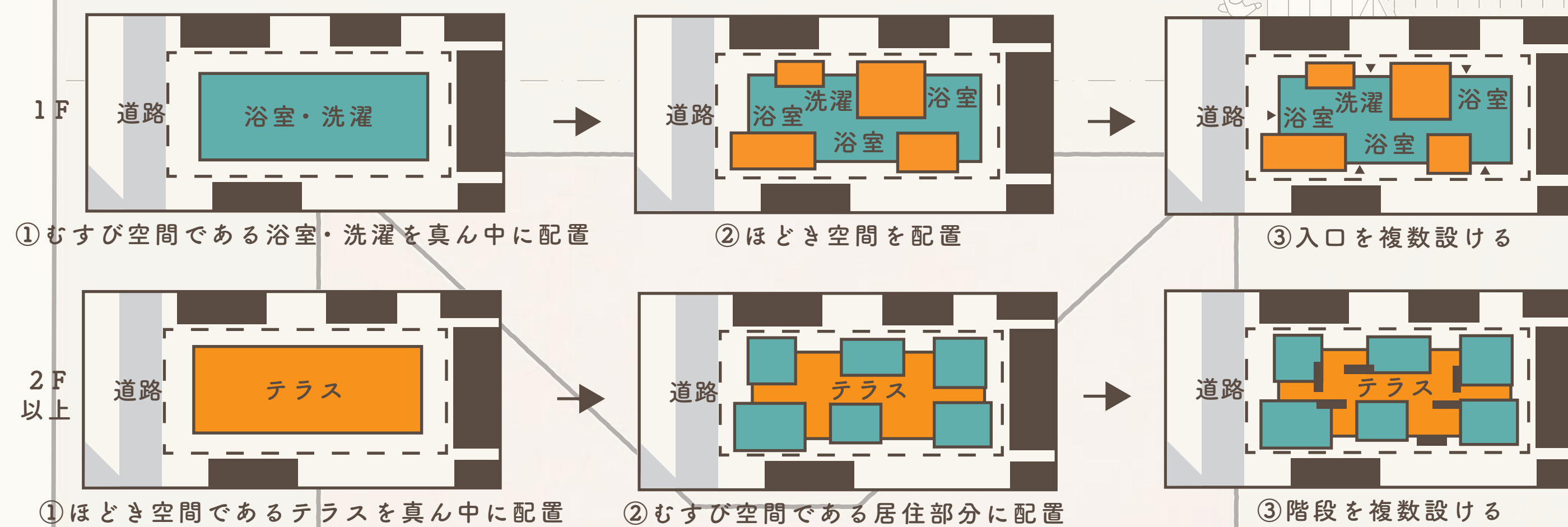
周辺建物の写真



■ダイアグラム



道路に対して閉じている



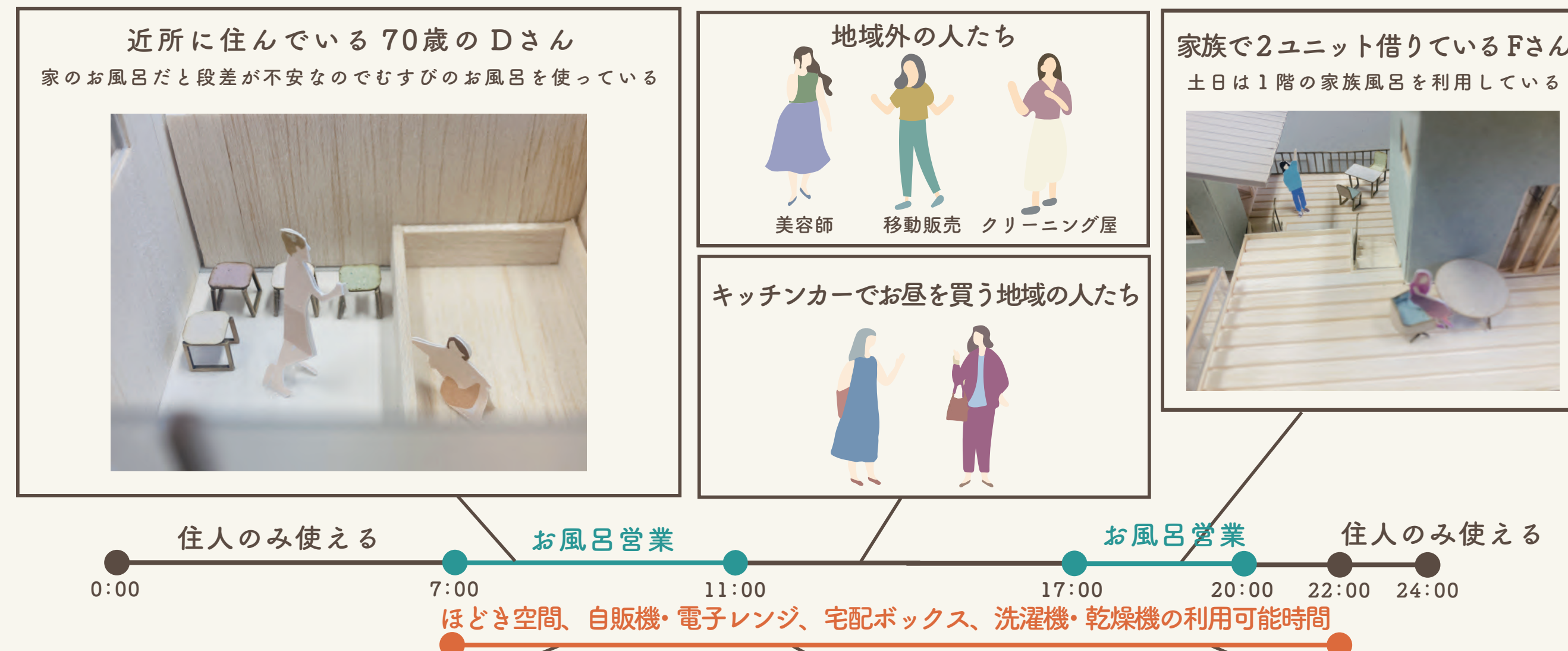
「食」「洗」「健」だけでなく「学」「遊」などの日常の行為を
軸としたむすびが今後新たにまちへ広がっていくことを望む。

1日の利用の流れ

■ 食のむすび



■ 洗のむすび



住宅地の在り方を変えていく

■ 空き家・空き地にひろがる「むすび」

「食」「洗」「健」だけでなく、「学ぶ」「遊ぶ」などの日常の行為を軸としたむすびが今後新たにまちへ広がっていくことを望む。

■ 福祉の選択肢が増えていく

福祉施設がまちに開かれていったり、グループホームやデイサービスがむすびに近い形へと変化したりすることで、福祉の選択肢がより多様に広がっていくことを期待する。



■ 公共サービスを住宅地へとほどく

住宅地では高齢者支援だけでなく、子ども、外国人、子育て世帯など支援を必要とする人が多くいる。今後は公共を一箇所に集約するのではなく、日常の中に編み込み、住宅地全体が緩やかにつながる公共のネットワークへと発展していくことを展望する。